

平成 31 年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：平成 31 年 1 月 22 日（火） 9：00～9：50

* 次の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに 2 つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2 項目のすべてに記入またはマークする。
 - ・ 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
 - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

— 開始後 —

1. 問題は 2 ページから 18 ページまでの各ページに印刷されており、第 1 問、第 2 問の 2 題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3

と表示のある問いに対して 2 と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号 3 の解答欄③をマークする。

〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際は HB の鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退出はできない。

受 験 番 号

--	--	--	--	--	--

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人びとのつながりを求める心情は、ふるさとへの回帰現象にケン^(ア)チヨに現れている。

試しに、ある全国紙の新聞記事データベースを使って、ふるさとに関連する言葉（ふるさと、故郷^{ふるさと}、古里、故里^{ふる}、ふる里）を含む新聞記事の数を拾ってみた。一九八〇年代から年々増え続けており、特に一九九七年頃からの増加傾向が目立つ。一〇年ほど前にふるさとブームが始まり、それは今も続いていると言える。

こうした近年の回帰現象については、国民の中の量的なエネルギーの大きさとという面と、ベクトルの多様さという質的な面に分けて考えることができる。

量的な面では、高齢者人口の拡大がその背景にある。

*新しいふるさと観を担っているのは、一九六〇年代に自由を求めて活発に活動した団塊の世代を中心としたエネルギーである。団塊の世代と呼ばれる約六八〇万の人びとが、組織を離れ始動し、地域社会の形に量的な影響を与え始めている。

生まれ故郷を離れ、高度成長の中の都会で激しい競争を経験してきた企業戦士である団塊の世代が、退職を迎えている。企業社会からは解放されたのだが地域社会との長い切断があり、^(イ)ボウキヨウの念の寄るべは用意されていない。新しい孤独が始まり、思い出や懐かしさなど再びふるさとの自然や人と人とのつながりを求める。このふるさとに向かう流れは集合体になると大きい。ふるさと関連の新聞記事が大きく増えた一九九七年は、団塊の世代が五十代に達する時期であった。

平均寿命が大きく伸び、多くの人たちがこれから自分も長生きをすると思っている。退職後の時間を余生ではなく、人生の第二ステージとして大切にしたいという意識が生まれている。「長い老後」を「普通の生活」として、また、自然の中でゆとりを持って、よりよく生きたいという思いが、今住む地域でのライフスタイルのモ^(ウ)サクと同時に、ふるさとに向かう一般的な心情に強く結びついているように思える。

一方、ふるさと志向のベクトルには、質的な変化が出てきていることにも注目する必要があるだろう。単なる移住ではなく、新しい目的意識が見られるようになってきている。

ふるさとに移住を望む人のうち、約四割が「仕事をしながら」の定住を希望している。そして仕事をしたいとい

う人たちについては、その三割は農林漁業を希望している。このアンケートからは、かつての避暑や避寒のための別荘生活のように、富裕な人びとに限られたものではなく、近年、より多くの人が田舎暮らしや二地域居住といった生活の一部あるいは全部を地方に移すような生き方に共感し、希望していることがわかる。

そうした人びとは、田舎を選びそこで畑を耕し、人びととふれあう日常の普通の生活を送る。都会暮らしでは得られない健康や安心、都市で失われた生き生きとした場所の感覚を求めているのだろう。

「田舎暮らし」関係の雑誌が毎月何十万部も売れているというのも驚きではない。ふるさとに向かうエネルギーの方向も多様に広がりつつあるのだ。

(a)、地方のさまざまな出来事に対し、一時的ではあってもつながりを持ち (甲) な行動に表そうとする動きも出てきている。震災や水害の際のボランティア活動の広がりはその一例である。

そして地方サイドでも、長年生活して当たり前と思っている自分たちの土地を、ふるさととして再認識し、自覚的な活動を始めている。地産地消やスローフードの運動など、自分たちが住む地域や人びとを大切にしようという動きも芽生えている。

このようなふるさとという場において、人びとは心情的にどんな利益や満足を求めようとしているだろうか。

もちろん、人生の比較的早い時期にふるさとを選んだ人たちにとって、都会に比べて地方での実質的な生涯所得の大きさ、マイホームの取得の容易さ、仕事におけるストレスの少なさといった物質的、健康面での「生活の満足」は無視できない。

しかし、どのような人生の段階であっても、自ら選びとった「新しいふるさと」は、X。たとえそれが個人益につながるものでも、ボランティア精神や周囲の人たちの生活をどう支えるかといった意識など、同時に「共に分かちあう満足」を含んだ充実感のある性質のものだ。

ふるさとが我々に与える安定感は、市場で取引きされるさまざまな保障や保険などとは異なった意味での「分かち合い」を含むものである。個人が独りに置かれられない、人間的な信頼性のあるコミュニティに生きているのは、ふるさとであり田舎である。

ふるさととは他人との「つながり」による満足を約束するはずであるが、つながりには不思議な性質がある。つながりは、だれにとっても初めから存在するものではない。各人がつながりをつくり出す行動を起こし、つながりを

持つことにより、実はそこに初めからつながりがあったことを発見するのである。行動という体験によって、つながりの存在が信じられることになるのだ。

(b)、先のアメリカ大統領選挙の際に、福井県の小浜市おばまがメディアなどに取り上げられたのも、つながりの力を感じさせる(乙)な例である。その時大統領となった、当時のバラク・オバマ候補と市の名前の音が同じであることに目を付け、積極的に外へアピールしたのだ。国内外からメディアが小浜市に(+)サットウし、大いに注目を集めることとなった。

A その時の経験が、小浜市の人たちを元気づけ、自分たちから動き出せば外へ向かって新たな発信ができるのではないかと自信を持つことになった。

B 一都市の限られた市民が、外に向けて思い切って働きかけたことで、外との新たなつながりが生まれることとなったのだ。

C もともと、小浜市はNHKの朝の連続ドラマ「ちりとてちん」の舞台として有名となり、観光が盛り上がった。

D それが、アメリカ大統領選の時のような楽しいつながりへと発展していったのであろう。

このような特徴を持つふるさとを維持し、新たなものをつくるためには、「行動」を積み重ねる長い時間が必要である。

短期間で計算できる目先の利益に対しては、ふるさとは十分期待に応えることができないかもしれない。しかし、人生全体を長い目で眺め、これを大切にすると人は、ふるさとは生涯にわたる幸福を与えてくれるものと映るに違いない。都市と地方の生涯価値のバランスシートについて、一度ゆっくり考えてはどうだろうか。

それでは、「新しいふるさと」は、人びとが行動する立場から見ると、どういう構造をしているものであろうか。(c)、ふるさとという観念は相対的なものである。

私は福井県の農村村部、朝日町(現越前町)の生まれである。東京に暮らしたときには、福井県をふるさとと感じたが、福井県に戻った後は、今住んでいる福井市は、もちろんふるさとであるが、生まれた町をよりふるさとと感じる。

ふるさとは、外からの視点と内からの視点の双方を持ち、そのことが、ふるさとの内と外をつなぐ一つの接点に

なる。

こうしたことを踏まえれば、まず、「新しいふるさと」には、外に開かれ他の地域に住む人びとと結びついていく、という観点が欠かせない。古いふるさとのように、部外者に対し内向きに閉じるのではなく、それを超えて、外に向かつて積極的につながりや連携を生み出す動きを欠かすことはできない。

もう一つは、ふるさとという意識と一体感を持つ人びとの内なる活動という観点である。ある地域に住んでいる人びとの⁽⁴⁾キゾク意識（アイデンティティ）や参加意識を強める主体的な活動に着目するのである。

もちろん、実際には、「新しいふるさと」において外への動きと内への動きが二つの部分に^{※せつぜん}截然と分かれているわけではない。

地域の人たちは、ふるさとの中で、のびのびと積極的に活動する。これは内なるふるさとづくりと見なすことができる。

しかし、このような活動は、外との接触によって触発されて起こされることが多い。地域が育んできた良いところは、外の目で発見されることが多い。まちづくりは、地域外の人たちの力が活かされていっそう豊かになる。「よそ者」の知恵は大切である。農村を訪れ、農業を楽しむ人たちと交流をし、都会からの移住者と一緒にまちづくりをする。より良いふるさとをつくるためには、地域は開かれたものでなければならぬし、外からやって来る人たちにとって、喜びとなることも必要なのだ。何よりも、自分と違う経験を持ち、異なる考え方を持つ人びとと出会い、話をすることは、生活の中の大きな楽しみになるのだ。

「新しいふるさと」の観念は、土地や場所の持つ自然のつながりに基礎を置きながら、外からのエネルギーを取り込み、皆でつくり上げるという要素が加わるところにある。内と外という二つのフィルターでふるさとの活動を見ることにより、内外の両方向が相互に働きあつて、「新しいふるさと」が形づくられることを感じる。

（出典 西川一誠『「ふるさと」の発想——地方の力を活かす』より）

※本文は、出典の記述を一部省略している。

（注） *新しいふるさと…人と人のつながりの再生に向けて、見直されるふるさとのこと。自由な意志に基づいて、自らが主体的につくりあげるつながりの一形態。

*バランスシート…企業の財務状況を明らかにするために作成される貸借対照表のこと。ここでは「損得

の「つりあい」という比喩的な意味で用いている。
 * 截然…：区別などがはっきりしているさま。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア)	ケン	チ	ヨ	①	貯	②	緒	③	所	④	著	⑤	諸
(イ)	ボウ	キ	ヨウ	①	忘	②	望	③	亡	④	防	⑤	冒
(ウ)	モ	サ	ク	①	刷	②	索	③	作	④	削	⑤	錯
(エ)	サ	ツ	ト	①	刷	②	察	③	殺	④	擦	⑤	刹
(オ)	キ	ヅ	ク	①	帰	②	起	③	規	④	着	⑤	貴

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は (a) 、(b) 、(c)

- ① そもそも
- ② ゆえに
- ③ たとえば
- ④ このほか
- ⑤ しかも

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）

9、

（乙）

10

（甲）

- ① 具体的
- ② 倫理的
- ③ 象徴的
- ④ 形式的
- ⑤ 理想的

（乙）

- ① ロジカル
- ② ユニーク
- ③ ナイーブ
- ④ パワフル
- ⑤ シリアス

問四 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

11

- ① 「自己的な満足」にとどまるものではないだろう
- ② 「自己的な満足」と同様に大切なものなのだろう
- ③ 「共に分かちあう満足」だけを求めているわけではないだろう
- ④ 「共に分かちあう満足」を追い求めているようなものだろう
- ⑤ 「自己的な満足」と「共に分かちあう満足」が共存して成立するのだろう

問五 本文 の中のA～Dの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、

次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 12

- ① A↓D↓B↓C
- ② B↓A↓C↓D
- ③ B↓C↓A↓D
- ④ C↓B↓A↓D
- ⑤ C↓D↓A↓B

問六 傍線部A「ふるさと志向のベクトルには、質的な変化が出てきている」とあるが、その結果の例の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 13

- ① 団塊の世代は退職後の生活をどのように生きようかと考える中で、思い出や懐かしさが込められているふるさとの自然や、より多くの人たちとの深いつながりを求める人が出てきた。
- ② 退職後の生活が短いものから長いものに変化したことで「仕事をしながら」の老後を希望する人が増加し、ふるさとで農林漁業を主として仕事をすることを求める人が出てきた。
- ③ かつての避暑や避寒を求めた別荘生活的な地方移住ではなく、農作業をしながら人びととふれあうような日常の生活を送ることを目的に、生活の一部あるいは全部を地方へ移すことを求める人が出てきた。
- ④ 平均寿命が大きく伸び多くの人が長生きをすると思うようになったことで、企業戦士として働いてきた世代において、農作業を中心として地域社会に貢献することを求める人が出てきた。
- ⑤ 今住む地域でのライフスタイルを確立するのではなく、これから長生きするうえで人生の第二ステージとしての地方在住を求める人が出てきた。

問七 傍線部B『新しいふるさと』は、人びとが行動する立場から見ると、どういう構造をしているものであろうか」とあるが、その構造として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

14

- ① 地域の人たちが地域の枠を超えて外に向かってふるさとを広げていきつつ、農業を通して都会からの移住者と一緒にまちづくりをするような、地域内外の人たちが連携して行う構造。
- ② 地域の人たちが地域内に住む人びとと結びついていき、積極的につながりや連携を生み出す動きと、ふるさとの中のびのびと積極的に行動するふるさとづくりが相互に働きあう構造。
- ③ 古いふるさとのように部外者に対して内向きに閉じるのではなく、外に開いて他の地域に住む人びとと結びつき、積極的につながりや連携を生み出そうとする動きがもたらす構造。
- ④ ふるさとという意識と一体感を持つ人びとの内なる行動と、外との接触によって触発されて起こされる地域の人びとの良いふるさとをつくろうとする行動が、反発しながらつながっていく構造。
- ⑤ 地域の人たちがふるさとで積極的に行動しつつ、地域外の人たちがふるさとの良いところを発見して地域の人たちと交流をし連携するような、内外の両方向から相互に働きあう構造。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 15

- ① ふるさとへの回帰現象は、団塊の世代と呼ばれる人びとが企業社会から解放されたものの新しい孤独に悩まされ、都会の地域社会に人と人とのつながりを求めたことで生み出された動きである。
- ② 長い老後が余生ではなく人生の第二ステージである意識されるようになり、多くの人たちが今の場所での暮らしを望まず自然の中でやりがいのある仕事をこなしたいと考えるようになった。
- ③ ふるさとへの移住を望む都会暮らしの人びとが増加する一方で、地方サイドでも自分たちの土地をふるさととして再認識し、自分たちの住む地域や人びとを大切にしようという動きも生まれている。
- ④ ふるさとを通じた「分かち合い」によって人間的な信頼性のあるコミュニティが生まれ、その中でつながりをつくり出す行動を起こすことによって、より強固なつながりを得ることができる。
- ⑤ 「新しいふるさと」の地域は開かれたものであり、地域内に移住してきた多くの人の外の目で発見される地域の改善点を積極的に受け入れることにより、より良いふるさとをつくることができる。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本はアジア大陸の東端に位置する島国である。イギリスはヨーロッパ大陸の西北に位置する島国である。両者はこの地理的な類似のゆえに、日本ではこれまでたびたび比較されてきた。

(a) 国土の周りを海で囲まれ、外国と国境を接することがないという点では、日本とイギリス本土は一見したところ、非常に類似している。しかも明治以来の近代日本はなにかと英国に学び英国をモ^(ア)ハンとしてきたため、日本が地理的環境の点でイギリスに似ていると考えることは、なにか日本人の心を明るくし、希望を持たせるものであったのかもしれない。

しかしこの類似は、両国に固有の文化がどのように形成されたか、そしてその質はという見地から改めて見直してみると、意外にそれ以上先に進むことのできない皮相なものであることが分る。それは日本とイギリスを取巻く海の性質がまったく違うからである。

イギリスはたしかに島国であるが、ブリテン島を囲む海は、大陸からこの島への外敵の侵入、異民族の移住を妨げる障碍^(シチガイ)とはなり得ない程度のものであった。ドーヴァー海峡は天氣の良い日ならば泳いで渡れる距離でしかない。

紀元前五五年に、シーザーのローマ軍はこの海峡を渡ってブリテン島に上陸し先住民族のケルト系住民を征服した。今なお各地に残るチェスター、セスター、カスターといった語尾を持つ地名が、ローマ^(イ)チュウトン軍の要砦を意味するラテン語に由来することはよく知られている。現在の英国人の祖先も、五世紀頃のゲルマン民族の移動期に、対岸のユトランド半島あたりから海を渡って、この島に侵入して来たゲルマンの諸部族であったのだし、イギリス建国後もスカンジナビア半島からの、デーン人の相次ぐ^(シンコウ)侵入は、イギリスにとって絶えざる悩みであった。ブリテンの島に対する最後にして最大の異民族侵入は、十一世紀中葉のノルマン人による征服であった。ノルマン人は元来はゲルマンの一部族であったのだが、いち早く北フランスのノルマンディー地方に住みつき、イギリスを侵襲したときにはすでに完全にフランス化していた。この征服のおかげで、それまでドイツ語に^(ウ)コクジしていた英語の語彙の大半がフランス語系のものに入れ替ったのである。

このように歴史時代だけを考えてみても、イギリスの島はつきからつきへと大陸からの異民族の侵略による影響を蒙り通しである。イギリスは島国であるようで、実は文化的には大陸の一部と考えることができる。(1)

^A日本の島国性は、この点まったく別の様相を呈している。考古学的な有史前のことは別として、建国以来日本の主要部分は現在に至るまで、異民族の直接侵略を受けたことがない。日本列島と大陸を隔てる日本海と玄界灘（なだ）の荒海は、長い間外敵の侵襲、異民族の侵入を防ぐ防壁の役目を果たしてきた。（b）外来文化受容の観点から見逃せないことは、日本を大陸から隔離する海が、外来文化の浸透をまったく許さないほどには荒くも、遠くもなかったという点である。（2）

日本がもしハワイ諸島のように、大洋の孤島であったならば、久しく外敵に襲われることもなかった代りに、大陸の大文明の恩恵にも浴することがなかったと考えられる。また日本列島と大陸との絶対的距離が今まで通りであったにしても、もし日本の外側、つまり太平洋の近い所に、非常に魅力のある、大きく豊かな別の島国が存在していたならば、そこへ到達したいという大陸民族の強い願望が、日本を通過基地として見捨てておかなかったかもしれない。

日本は X と、大陸との距離がつかず離れず都合の良いものであったこと、および日本列島が、一応自給自足のできるへイ（イ）社会を成立させ得るだけの大きさと、南北に延びる豊かな風土を持っていたという、この三つの条件の偶然による組合せが、世界の文明史上、稀（まれ）に見る特異な性格を持った文化を發展させる要因となっているのだ。

イギリスのように外敵の侵入、異民族の大量移住という形で外来文化を受容した場合には、そこでの文化接触は当然のことながら外来者と先住者の間で、じかに日常生活のレベルで行われることになる。これに比べると、日本の場合には増田義郎氏（*ますだ たよしお）が『純粹文化の条件』（講談社現代新書）の中で豊富な実例と明快な論理で示したように、異文化との接触が主として、書かれた文献とでき上った製品の輸入という、人間を切り離れた形で間接に行われたために、世界の外来文化受容の在り方としては（甲）なものになっているのである。もちろん我国においても、特殊技術（たとえば織りもの、金属加工など）を持った異民族集団の小規模な（*）シヨウチは稀でなかったようだが、これはあくまで呼び寄せであつて、向うから勝手に乗込んで来たわけではなく、やがては周囲に吸収されてしまうものであった。（3）

私は増田義郎氏の日本文化成立に対する見解と、^B日本文化は雑種性ではなく純血性を本質とするという指摘が、日本人の独特な言語観をもうまく説明できるものとして高く評価している。（c）戦争や強制によらない文化

受容というものが、いかに気楽なものであるかについての氏の文章をつぎに引用してみたい。

日本は呑気^{のんき}な国である。このことは、有史以来の日本の外国文化受容の全状況について言えると思う。大体外国文化の受容とか摂取という表現自体が日本的なので、たいへん余裕があったのである。ルーマニアでも台湾でもどこでも、外国文化を受容するとか摂取するとかすましこんでいることなどどうも不可能だったろう。侵略者や支配者が泥靴でどどん踏みこんでくる。無理な命令をする、税金を課する、人間を徴発する、女に手をつける、という惨澹^{さんたん}たるありさまで、そうしたひどい目に会いながら、必要上止むなく外来者のことばを覚え、おこぼれの品物をちようだいし、相手からこつそり文化をかすめ取る、というのが常態ではなかったのだろうか。それに反して、われわれの国日本は、外国から支配されず、また外国人の乱入もうけず、しかも文化だけはふんだんに中国やヨーロッパから取り入れることが出来たのである。

(増田義郎「しゃべる必要・不必要へス・ペイン語・英語」永井道雄・梅棹忠夫編『私の外国語』一八五—一八六ページ、中公新書、一九七〇)

たしかに外国人と日常生活の中で、直接交りながら異文化に接触して行く仕方と、書物を読み技術や製品を受入れることで、外国文化を間接に吸収することとの間には、同じ文化受容といっても比較にならないほどの相違がある。(4)

前者の場合には、増田氏も指摘するように、外来文化とはまさに強制であり押しつけであるが故に、受入れる側の希望や都合はまったく無視される。たとえ優れたものをもろうことになるにしても、支払う代償も当然大きいはずである。そこで外来文化とは重くるしい、なにか忌わしいものという気分がつきまとう。また生きた人間を介する文化の授受には、血の混交が伴うのが常である。(5)

ところが日本の場合はどうであろうか。隋唐^{ずいとう}からの文化輸入時代は言うまでもなく、中世のキリシタン文化摂取の場合も、幕末明治期の泰西^{*}文化受容の際にも、外来文化の運び手は限られた数の僧侶、学者、技術者そして商人なのであって、兵隊や一般人が大挙して押し寄せて来るようなことは一度もなかったのである。

またこちらから仕入れに出向いて行った人間の数も(乙)いる。この人々は日本にない秀れたものを買集

め、進んだ技術を身につけ、高邁せうまいな学問思想を学んで戻って来る。つねに日本人の立場で、日本に役に立つもの、持って帰れば価値が出るものだけを選んでくるのだから、日本人が目をつけて輸入したものは、あちらでも超一流のものであることが多い。高文明の、それも上澄みだけを掠かすめとる仕方かたで異文化を取入れたのである。

(出典 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』より)

(注) *増田義郎：日本の文化人類学者。

*泰西文化：西洋文化。

*高邁：けだかく優れていること。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分ぶぶんを漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

16

、(イ)

17

、(ウ)

18

、(エ)

19

、(オ)

20

(ア)	モ	ハ	ン	①	判		
(イ)	チ	ユ	ウ	ト	ン	①	注
(ウ)	コ	ク	ジ	①	酷		
(エ)	ヘ	イ	サ	①	鎖		
(オ)	シ	ヨ	ウ	チ	①	奨	
				②	版		
				②	招		
				③	差		
				③	告		
				③	柱		
				③	範		
				④	汎		
				④	証		
				④	控		
				④	克		
				④	忠		
				④	汎		
				⑤	承		
				⑤	唆		
				⑤	黒		
				⑤	抽		
				⑤	般		

問二 空欄（ a ）（ c ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。
ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は（ a ） 、（ b ） 、（ c ）

- ① しかも
- ② むしろ
- ③ つまり
- ④ そこで
- ⑤ たしかに

問三 空欄（ 甲 ）（ 乙 ）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（ 甲 ） 、（ 乙 ）

（ 甲 ）

- ① 短絡的
- ② 好意的
- ③ 例外的
- ④ 能動的
- ⑤ 紳士的

（ 乙 ）

- ① 高が知れて
- ② 変化に富んで
- ③ 輪をかけて
- ④ 極限に達して
- ⑤ 腐るほど

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

- ① 他国から侵入される心配がないという幸運な条件
- ② これより東には大海原しかないという行き止りの条件
- ③ 周辺の海が荒くも遠くもないという絶妙な条件
- ④ 異民族の直接侵入を受けたことがないという楽天的条件
- ⑤ 大陸を隔てる海が荒く敵が侵入しにくいという地理的条件

問五 次の文章は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 27

イギリスの場合でも南米の場合でも、外来文化の洗礼を受けた後では、人間そのものが以前そのままでは在り得なかった。

- ① (1) ② (2) ③ (3) ④ (4) ⑤ (5)

問六 傍線部A「日本の島国性は、この点まったく別の様相を呈している」とあるが、「別の様相」とはどのようなことか。次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① 狭い海に囲まれ外敵の侵入により形成されたイギリスの文化に対して、広い海に囲まれ外敵に襲われることなく優れた文明を受容できた日本では異なる性質を持つ文化が発展したということ。
- ② 何度も外敵の侵入や異民族の移住を受けてきたイギリスが優れた文化を発達させた一方で、外敵の侵入を受けず大陸の大文明の恩恵に浴することができた日本の文化は微弱なものになったということ。
- ③ 狭い海によって何度も異民族の侵略を受けたイギリスの文化が大陸と同じものになった一方で、広い海によって異民族からの支配を受けなかった日本の文化は世界唯一の文化として発展したということ。
- ④ 日本と大陸を隔てる日本海と玄界灘の荒海は、長い間外敵や異民族の侵入を防ぐ役目を果たしてきた一方で、大陸から日本へ文化を伝えるのを防ぐという役には立たなかったということ。
- ⑤ イギリスと大陸との間の海が外敵の侵入を防ぐ障碍となり得なかった一方で、日本は大陸からの侵略を受けるには海が広すぎ、大陸からの文化を受入れるには狭すぎることなかったということ。

問七 傍線部B「日本文化は雑種性ではなく純血性を本質とする」とあるが、「雑種性ではなく純血性」といえる理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 29

- ① 日本文化は外敵の侵入や異民族の大量移住という形で強制的に外国文化を受容したのではなく、日本人が外国へ出かけて行って積極的に外国文化を受容したものだから。
- ② 日本文化は外国から強制または押しつけによって大きな代償を支払って外国文化を受容したのではなく、限られた僧侶や学者、技術者、商人などが気楽に外国文化を受容したものだから。
- ③ 日本文化は侵略者や支配者が自国に踏み込んでひどい目に会いながら止むなく外国文化を受容したのではなく、自由に中国やヨーロッパの優れた外国文化をそのままの形で受容したものだから。
- ④ 日本文化は日常生活の中で直接交りながら外国文化を受容したのではなく、日本人が日本人の立場から日本にとって良いと考えて持ち帰った外国文化だけを受容したものだから。
- ⑤ 日本文化は受入れる側の希望や都合をまったく無視されながら強制的に外国文化を受容したのではなく、全く外国文化に影響されない日本独自の文化を国内で発達させてきたものだから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 30

- ① 日本とイギリスは島国という点で地理的な観点から見ると類似しているように見えるが、両国に固有の文化がどのように形成されたかという見地から見直すと日本の文化の奥深さが明白となる。
- ② ブリテン島を囲む海は外敵の侵入や異民族の移住を妨げる障碍とはならなかったため、イギリスには昔から多くの外敵や異民族が侵入し、その影響を受けてイギリス文化も大陸の文化と同化していった。
- ③ イギリスでは外敵の侵入、異民族の大量移住という形で直接的に外来文化が受容されたが、日本では文献や製品の輸入により間接的に行われ、異民族からの外来文化や技術の伝達はまったくなかった。
- ④ 増田氏の文章を踏まえると、有史以来の日本の外国文化受容の全状況において、外国から支配や乱入をされず文化だけを余裕を持って取り入れることができたという点で、日本は呑気な国であったと言える。
- ⑤ 外国文化を受容することは、血が流れるような事態を伴うことが常であるが、日本は知識人たちを通じて、どのようなものでもふんだんに輸入することで高度な異文化を取入れることができた。